



雲のうえ  
19



北九州市



# 合唱組曲 北九州。

絵 牧野伊三夫

1978年、市制15周年を記念して生まれた合唱組曲『北九州』は、「市民が市民のために演奏し、歌い継いでいく」ことを目的に作られた組曲だ。「序章」「早鞆の瀬戸を渡り給え」「風」「九州の山は」「河童の歌―旧五市の結びを」「港」「石の羊―平尾台断章」「祭り―地藏祭り」「祭り―太鼓祇園」「父祖より幼き者へ」「梅開く」「終章」と、全12章構成の大作には、ふるさとの自然・風物や文化がおりこまれてある。曲調は終始ダイナミック。約40分間の物語はあつという間に駆け抜ける。

平成25年、2月に開かれた定期演奏会で

は、2000席規模の大ホールの壇上に、400人もの老若男女の民間合唱団員が集結し、市内で最も歴史のある市民オーケストラ『北九州交響楽団』を中心に、いくつかの管弦楽団が肩を寄せ合うように並んだ。観客は満員御礼。それを聞けば、故郷を強く思う気持ちがいかにどのものか、おのずと伝わってくる。

産業の発展が著しかった時代、合併によって地域が渾然一体となり「文化不毛の地」と言われたこともあった。が、この歌を聴けば、それはつまらない誤解だったと知ることができる。



合唱組曲「北九州」第1楽章より「序章」「早鞆の瀬戸を渡り給え」

北九州童謡・唱歌  
かたりべの会

成熟した歌声は若く、年若い者の歌声とは違う重みで、深く心に届く。1989年創会。女声（かたりべ）44名、男声（アンクル・ボイス）27名、総勢71名で編成。うち10名は1期から参加。指揮と指導をする高山先生と天川先生（右写真）の小学校教諭時代の同僚も多く在籍している。1年に1度開催の定期演奏会では2000人もの集客を誇る、実力派の混声合唱団。



特集

# とどけ、歌。

写真：齋藤圭吾 題字：牧野伊三夫  
文：石田千、大竹聡 つるやもこ

「あー」声にだしてみる。  
「おー」いつもよりも腹にちからを込めて。  
「うー」ほほえみをうかべると、  
きつと、気負っていた心がすっと軽くなる。  
自分を奮起させ、友だちを元気づけるために歌おう。  
体と心をひとつに結びつけるために歌おう。  
「えー」ほら、自分の声が空間を貫いていく。  
「いー」となりのひとの歌声が心地よく耳に届いた。  
ねえ、きみにも聴こえてくるかい、この街のうたが。



## 北九州少年合唱隊

3歳～17歳までの少年のみで編成。澄んだ美声は練習の賜物。隊員として恥ずかしい態度で行動する、歌を通してみんなで仲良くするなど、合唱隊憲章を掲げて活動している。「宇宙戦艦ヤマト」「天空の城ラピュタ」など少年らしい選曲と歌に合わせた振りが人気で、出演する合唱祭でも注目の的。定期演奏会の合唱ミュージアムの今年の演目は「星の王子さま」。



街の合唱団を訪ねて

## 心に詩、くちびるに歌を。

文|| つるやももこ

「歌はね、ぼくにとって青春を取り戻すいちばんの方法なんだ」

肩越しの声に振り返ると、白髪の紳士が立っていた。わかりませんが、みなさんの歌声を聴いてそう思いました。紳士は満足そうにうなずくと足早にエレベーターへ乗り込んだ。つい先ほど男女混声合唱団『北九州童謡・唱歌かたりべの会』の定期練習が終わり、家路へ急ぐメンバーがエレベーターホールの前に集まっていた。会が結成して

今年で25周年、メンバーの平均年齢は75歳。人は成熟するにつれて若くなると言っただけだったか。数時間歌い続けた人生の先輩方の表情は清々しく、心の高揚が上気した顔に見て取れる。

そのなかで、笑顔で団員を見送っていたのは、会で指揮と指導をする高山保材さんと天川悦子さんだ。2人は60年来の合唱の友である。北九州市の隣、直方市立直方北小学校で初めて歌唱指導した生徒を、『小



学校音楽コンクール」で全国2位に導いた名コンビ。栄冠は友情を深め、大好きな歌が2人を繋いできた。

「気付いたらこんな歳になっていたんですね。ここまで来たら、お互いどちらかがくたばるまで続けよう」と話しています」と、天川先生が高山先生に目配せする。すると、「ははは、そうですね」と高山先生がよく響く声でゆったりと答えて、笑い合った（後で高山先生がこっそりと教えてくれた

のだが、団員の合い言葉は、「コケないで、風邪ひかないで、ボケないで」だそうだ。

『かたりべの会』が歌うのは、いつかどこかで耳にしたことがある日本の童謡・唱歌や、日本語に訳され親しまれてきた海外の伝統民謡だ。

『荒城の月』や『まっかな秋』『雪の降る街を』など、どれも親から子へと歌い継がれ、小中学校の音楽の教科書に必ず載っていた懐かしい歌ばかりである。とはいえ、それもまた年代までの話で、最近の教科書には、今どきのポップ・ミュージックが並んでいるという。

「今の歌の歌詞が日常のつぶやきならば、昔は『詩』なんですよ」

旋律にのせなくても、歌詞を文章として読むだけで味わいのある物語になっている、と、天川先生は言う。美しい日本語の歌を語り継いでいかねばならないと、合唱団の名前を決めた。

「定期演奏会では、涙を浮かべて聴いて

上・「はい、両手で三角のおにぎりを作っておへそに置いて、息を吸って〜」。高山先生の指導による恒例の準備体操。御歳83歳にして7つの合唱団を掛け持ち指導する。右・「北九州少年合唱隊」でタクトをふるうのは、井上博子先生だ。

「北九州アカデミー少年少女合唱団」の練習風景。学年に関係なく、和気あいあいと楽しそうに練習する姿が清々しい。小さな子は、歌唱を通して年上の優しい先輩に触れ、その行動や歌声に憧れながら成長するので、自然とリーダーシップのとれる子に育っていく。



おられる方もいる。歌は郷愁を呼び起こし、誰もがいつかの思い出と重ね合わせるのでしょうか。でも、わたしは満州（現在の中国東北部）で生まれ育っているのです、幼い頃に母国の歌を聴いても、歌詞の本当の意味がわからなかったのです」

あるとき、天川先生が通う小学校に、ピアノと共に日本から若い男性教師がやって来た。演奏に合わせて『朧月夜』を歌ったが、オボロヅキヨ、サトワノホカゲ（里わの火影）、カワズノナクネ（蛙の鳴く音）……と、少女にはその歌詞がピンと来なかった。

「なぜなら、大陸の月には霞がかからない。乾燥した大地では、太陽の輪郭さえも真っ赤にくっきりと見えたのですよ」

父母や先生から歌を通して教えてもらった憧れのかの地のこと。歌に登場する母国・日本の景色が情景へと変わったのは、それからずっと後のことだ。山頂を雲の上に突き出す『ふじの山』は、想像で絵に描くだけだったし、白波の立つ海を初めて見たのは12歳のとき。今の北朝鮮へ修学旅行に出かけ、広がる景色を前にうれしくて『われは海の子』を学友と合唱したそうだ。

日本にいる今は、あのと暮らした満州の広大な原野を懐かしいと思う。歌はそれぞれの人の思い出と共にあり、その歌詞の意味を心から理解してこそ、情感のこもつ

た歌い方をすることができると、天川先生は自らの経験でそれを知っている。だからこそ自分が指導する際に、歌詞を朗読する習慣を欠かさない。

次回の定期演奏会で歌う『殖生の宿』を練習していたときのこと。いつものように歌詞を朗読してからこう切り出した。

「殖生の宿はどんな宿だと思いますか？」するとひとりの男性が手を挙げて、「田舎の農村に建つ、小さな家でしょうか」と答えた。すると、「いずれにしてもここは貧しい家。あなたたちの家よりは粗末ですね」と天川先生。笑いが起こったのを聞いて間髪いれずにハキハキと続けた。

「玉の装い、瑠璃の床。ピカピカした家などちっとも羨ましくない。立派でなくともそれに代え難く愛おしい、楽しき我が家を想う歌詞です。その気持ちになって歌いましょう。はい、立って。イメージ！」二度目の歌声が、がらりと変わった。各々の楽しき我が家、その一軒一軒に明かりがぼっと灯った。

「歌には作った人のいのちが入っていますからね」。高山先生が言った。そのいのちを掘り起こし、歌が持っている力を引き出すのが「声」。普段の話し声を歌声に変えたその瞬間、さっと心構えも変わる。そ

のことを「ハーモニーに浸る」と表現した。「幼いころ、一度ハーモニーに浸った子どもは、一生歌うことを好きでいてくれます」高山先生は、市内の7つの合唱団の指導をしている。その中のひとつ『北九州少年合唱隊』は、日本で7団体しかない、少年（3〜17歳）だけで編成された合唱団だ。夏休みも残りわずかとなった日に、恒例の合宿に合流させてもらうことになった。

海沿いの『もじ少年自然の家』の玄関ホールに、ピアノの演奏と歌声が響く。少年だけで歌っているとは思えない澄んだ声色に身震いした。この日は4歳から17歳まで9名が練習に参加していた。

『北九州少年合唱隊』は、毎年、定期演奏会で合唱ミュージカルを上演している。『白雪姫と7人の小人たち』『くるみ割り人形』『シンデレラ』『アニー』など、だれもが知っている物語に、合唱（歌）を織り交ぜてオリジナルストーリーに仕立てる。麗しい声とルックスで、王子はもちろんお姫様も積極的に演じる。男の子は、女の子と違ってこだわりが強い。そして純粹だから、歌い始めると何より夢中になる。「普段は悪ガキだけだね」。高山先生は笑う。

「通常の合唱団と違うのは、男の子には、必ず変声期がやってくるということですね。本人が（声を出すのが）キツいなど自覚し



た時点で、そのまま無理に歌い続けることをやめさせます。でも、歌うこと自体は決してやめさせません。代わりに、狭い音域なりに、ごく自然に美しく発声ができるコツを指導するんです」

### 北九州アカデミー 少年少女合唱団

幼児から高校3年生まで総勢106名で編成。海外へ演奏旅行にも頻繁に出かけている。坂田先生のモットーは「歌で心を育てる」。子どもたちだけで行うパート練習や休憩時間を交流の場と考え、メリハリある練習が心げけるなど、子ども同士の心の交流と自主性を大切にしながら、合唱の魅力を伝えている。

そのまま何もしなければ、たとえばアルトは最低音域のバスに変声するけれど、きちんと訓練すれば（ひとつ高い音域）テノールに落ちつくことができる。そうすれば、バスも難なく歌いこなせるようになる。リードボーカルの中学一年生の魚住龍太郎くんの美声が響いた。歌っているのは『天空の城ラピエタ』のソロ・パート。真っ黒に日焼けした長身のバスケット少年と合唱は、一見結びつかないが、小学校一年生のときに入隊して以来、美しいボーイ・ソプラノで歌い続けている。「彼は中学生になつてさらに自信がついてきたみたいだね」

子どもは、褒められ、認められたことを糧に伸びていく。だから、教えてやるのではなく、子どもが持っている隠れた力を引き出したい。「音符と音符の「間」に本当の音楽があるんですよ」と高山先生は言った。合唱は、その見えない「間」を声というカタチにすること、と。

は過去への懐かしみ、ときに悔恨……、さまざまな心のカタチだ。たくさんの声、たくさんの感情が重なり、それがひとつのハーモニーとなったとき、聴く人は心を震わせる。歌い手も聴き手もその幸福を知っているからこそ、歌が好きになる。この街に限らず、どこの都市にも小さな村にも歌があり、歌う人がいる。歌は日々の営みがある証しなのだ。

エレベーターの前で出会った紳士が言っていた言葉がよぎる。「歌はいいよ。山本有三の詩にもあるだろう。（心に太陽を持ってくちびるに歌を持って）って」

己の人生に飲びや哀しみが訪れたら、陳腐な言葉を吐く代わりに、ただ嗚咽しながら泣き崩れる前に、ひと呼吸おいて心に詩を思い浮かべよう。そうして、メロディを口ずさんでみればいい。

歌を愛するチャンスは、だれにでも平等に訪れるのだから。

\*1 『朧月夜』作詞・高野辰之、作曲・岡野貞一。大正3（1914）年、小学校唱歌として初出。  
\*2 『殖生の宿』イングランド民謡。明治22（1889）年、里見義訳詞。  
\*3 『心に太陽を持って』ツェーガル・フライシユレン（ドイツ）作。山本有三の訳詞は昭和10（1935）年『新潮日本文学アルバム』（新潮社刊）に掲載。

声にカタチがあるのなら、重なり合ったそれをハーモニーと呼ぶのかもしれない。以前訪れた合唱祭で、ひととき美しいハーモニーを奏でていたのが、『北九州アカデミー少年少女合唱団』だった。北九州市立黒崎小学校（現・黒崎中央小学校）の合唱部を卒業した有志が、ずっと歌を歌い続けたいと熱望し、当時の顧問だった坂田正克先生の元を集まったのが団の始まりで、すでに39年目を迎えている。八幡西区にある熊西小学校を練習場にしてからは30年。「いつでもここに来れば歌が歌える。そう言つて、親子二代で来よる子もいる」と、坂田先生はうれしそうに話してくれた。

そんな坂田先生の専門教科はじつは数学。大阪の小学校に勤務していた時代に、専門外の合唱部顧問を上司に任されたときは、楽譜記号さえも読めなかったという。成績を残すために、ただひたすら優秀校の合唱を聴き歩き、おそらく理系の先生らしい持ち前の分析力を持って指導を重ね、黒崎小学校の全国学生音楽コンクール優勝をはじめ、着実に成績を積み上げてきた。

「やればやるだけおもしろいくらいに結果がついてきた。でもね、歌は勝つために歌うものじゃないと、ふと思つたんです。子どもにも素直に楽しんで歌ってほしい」勝つことで得る賞賛を捨てた坂田先生。

その代わりに、たくさんの贈り物を教え子たちから受け取ることになる。それは練習風景を見ればすぐにわかる。子どもたちからの信頼だ。いよいよ歌おうと整列したみんなの眼差しは先生を見つめ、キラキラと輝いている。そうして、歌い出したその声は、一筋になって天に向かって突き上げるように高く高く昇っていき、やがて優しい波を描きながら、聴いているわたしたちの元に降りてくる。声がハーモニーに変わる瞬間を体験した。

「家でひとりで歌っていても、じつはそんなに上手じゃないのよ」。すっかり聴き惚れている横で、メンバーの母親が耳打ちする。「でもね、みんなで歌うと不思議と素晴らしい音楽になる。合唱っておもしろいわね」と。

坂田先生は、「清楚な声、クセのない声で歌いなさい」と繰り返し指導する。それは、「他者と調和し、他者を想って歌いなさい」というメッセージであり、またいっぽうでこれから希望を持って成長していく若者に「他人の期待や媚に染まらずに生きろ」という先生のエールのようにも聞こえた。

合唱は、年齢も環境も違う者が、ひとつの世界を歌う。歌い手たちが歌声に乗せるのは、まだ見ぬ未来に対する希望、あるい

作家、火野葦平に、『花と龍』という傑作がある。故郷松山から門司、彦島、戸畑、若松へと流れ着いた主人公玉井金五郎と、門司以来歩みを共にした妻マンの波乱に満ちた生涯を描いた実録小説で、著者自身も玉井勝則という本名で登場する。金五郎、マン夫妻は、葦平の実の両親である。主たる舞台は、明治以降石炭の積み出し港として繁栄した若松。筑豊の炭鉱から運ぶ込まれた石炭は、この地で解に積まれ、沖の大型運搬船へと移された。この運搬作業において陸上の作業をするのは、陸仲仕、海上で働く者は沖仲仕、彼ら港湾荷役労働者を束ねる組織は、親方の名前を冠して〇〇組と呼ばれた。

荷役仕事の奪い合いのためなら暴力沙汰も厭わぬ荒くれたたちの世界にあつて、金五郎が玉井組の看板を掲げ、金五郎をオヤジと慕う小方(常用の仲仕)たちを率いるようになったのは明治39年の2月、金五郎27歳の春先のことだった。明治20年代末の日清戦争に続き、前年の日露戦争に勝利したこともあり、すでに石炭の積み出し港として人口急増中であつた若松はさらに殷賑を極める。明治維新

のときおよそ1000人だった人口は、大正元年には3万2528人に膨れ上がる。九州各地や中国・四国地方からも大量の労働者が流れ込んだ。多くは農家の次男、三男や娘たち、田畑も分けてもらえぬ若者たちが、好景気に沸く若松へやってきた。若松は、働き場を求めて人が集まることで独自の文化を生み出した、産業の街であり、労働者の街であつた。この地では、港湾の荷役に従事した労働者を「ごんぞう」と呼んだ。ごんぞうの数

は最盛期には数千人に及んだと伝えられる。長屋に住み、荷役の日で暮らしをたてる彼らは、船を漕いだり石炭を積み込んだりしながら歌を歌つた。それが「ごんぞう歌」だ。『花と龍』(岩波現代文庫版)にもこの歌が出てくる。解の中でバイスケと呼ばれる丸籠に石炭を満たす「入れ鉢」作業をしていた女仲仕がまず歌う。あたしや、仲仕で、半纏育ち、長い着物にや、縁がない……すると今度は解の船頭が、ごんぞうたちに向けてきつい文句を浴びせる。

## 男と女の

## ごんぞう歌。

文Ⅱ大竹聡

こうなると、ごんぞうの男衆も黙つてはおらず、

船は破れ船、

船頭は片目、

とやり返し、あげく、双方をとりなすように金五郎がひとくさり。

若松みなどの

ゴンゾは花よ、

粹な手さばき

日本一……

女は女なりに、男は男なりに、自身や互いを揶揄するようなのだが、そこには卑下よりも、むしろ激励を読み取ることができ。田植え歌や酒の仕込み歌などの労働歌に比べて荒っぽく、痛快で、これぞ沖仲仕という勇ましさが漂っている。

しかし時代は移り変わる。満州事変後、石炭搬出拠点として全国的に認知されるまでに繁栄した若松だが、昭和30年代に入ると頃から衰退していく。

火野葦平は昭和33年の自著解説の中で、親分同士の拮抗も大出入りもなくなった若松では、ごんぞうも荷役会社の従業員として賃金を保証され、かつてのように荒々しくなくなったと書いた後でこう続けた。〈作品中のゴンゾ唄を知っている者も稀になつた〉

このときから数えて平成25年の現在までに55年もの歳月が流れている。人の手による石炭荷役という仕事自体がなくなったことを思えば、この労働歌は残りようがないところだが、若松には今も、ごんぞう歌を歌える人がいる。

野依勇武さん。昭和4年生まれ。教職から北九州市議へ転じて長く市政に従事したご自身が、ごんぞうたちを束ねた野依組の跡取りだが、親分にはならず、労働者の立場から若松の現代史を見据えてきた。



野依勇武さん。教職を経て北九州市議へ転じ、長きにわたって市政に従事してきた。北九州の近現代の経済史、文化史を研究し続ける古老は、ごんぞう歌の継承者でもある。

# 若松ごんぞ歌

明治20年代生まれの  
港の女性から

おいはごんぞよ法被が常ん着

絹の着ものに縁はねえ

① 縁のないもの金の指輪に金紗の帯よ

可愛ややこにべべ欲しや

② 可愛ややこに紅いべべ着せて

蛭子祭りに行かせたい

③ 酷い酷い酷いよごんぞの鼻はよ  
バッチロ笠んかげで炭化粧

アヨイ・コゲヤエー

アコゲヤエ・アコゲヤエー



野依さんが明治20年代生まれの土地の女性が歌うごんぞ歌を口伝してもらい、書き残したもの。ごんぞうの心情を吐露する率直な言葉に、互いを励まし、慰める気持ちが染み込んでいるようだ。

る。その繰り返し。女郎と一緒にです。借金が増えるから生涯働かないといけない。そしてひとたびケツを割ればすぐに捕まってリンチされる。お袋は言っていました。男の悲鳴は女の悲鳴とは違う。あれを聞いてしまったら、ひと晩中眠ることはできないとね。そういう支配構造の中で、ごんぞうたちは口銭を取られ、低賃金で働かされてきたのです」

前ページの歌は、野依さんが、明治20年代生まれの女性から口伝されたごんぞ歌だが、『花と龍』のゴンゾ唄とは歌詞がずいぶん違う。

「金五郎が瀬戸内、マンさんが広島山村。若松にはそういうところから出てきた人が集まって、そうして急激に人口が増えてきた街だから、言葉も歌も、独特のものが生まれているんです。ごんぞ歌も、組によって内容が異なるというのではなく、ここへ来た人たちが生まれ育った村で歌われていた歌が緋交ぜられて、ごんぞ歌になっている。つまり、集まったごんぞうたちの交流の中で、歌詞もさまざまに変わってきたんです」

野依さんのお母様は、大分県は耶馬溪の出身。幼い頃から鯛生金山で働き、中津では女中さんみないなこともしていた。よく働く娘がいるというので、あんな嫁をもら

わせたなら酒ばかり飲んでいたオヤジも落ちて着くやろということでは嫁にもらわれて来たのですと、野依さんは述懐する。

「朝から晩まで人が出入りするような暮らしが嫌で、耶馬溪に帰ろうと逃げかけたことが何度もあったと聞いています。そんなお袋は、ごんぞ歌を、私への子守唄がわりに悲哀をこめて歌いよった。寂しい気持ちをこめて歌いよった。泣くようにして歌う。メロディー全体を貫く雰囲気や哀調を帯びている。お袋自身に故郷を偲ぶ思いがあったから、故郷を離れて暮らすごんぞうたちに共鳴し、共感をもっておつたんでしよう。私は、この街は、そういう人たちが支えとった街やと思うとる」

野依さんが口伝されたごんぞ歌の歌詞を見ると、「絹の着物」や「可愛ややこ」「紅いべべ」といった言葉から、女のごんぞの気持ちや歌ったものと推察される。

けれど、第4連にきて、その歌の印象はがらりと変わるのだ。野依さんは言う。

「嬢という字は、かかあ、と読むんです。これは、自分の嫁、妻のことです」

男のごんぞうが、自分の嬢のことを酷い酷いと歌っている。彼女たちの、バッチロ笠に隠れた顔がいつも石炭で黒く汚れているのを炭化粧と呼びつつ、それを酷い酷いと歌っているのだ。

「バイスケ籠を天秤に提げ、バッチロ笠をかぶり、手甲、脚絆に法被姿、というのがごんぞうの格好でした。仲仕の中でも常用の者を小方、臨時雇いを割り込みといって、扱いがまるで違う。小方には盆と正月には組の法被と手ぬぐいが配られるが、常用であるだけにケツを割る(逃げ出す)とリンチを受けた。割り込みにはそこまでの責任は追及されないが賃金が極めて安い。割り込みの中には渡りごんぞうといって、重さが50キロもある天秤棒を担いで船に渡した木の板の上を巧みに歩く専門職もいた。この人たちはその技術で食べられるからこの組織にも属さなかった。けれど、割り込みの中でも朝鮮半島出身の人たちは名前さえ呼ばれず、常に命の危険がつきまとう仕事をあてがわれた。作業中に死んだ人も少なくない」

ごんぞうの現実を語りながら、野依さんはひと言、言い添えた。

『『花と龍』は、親方の物語だから……』  
親方を中心に据えた視界からは、どうしてもこぼれてしまう現実があるのだろう。

「小方は組の判子ひとつで遊郭にも泊まれるし、酒場で酒も飲めるが、支払いは全部、後から組に回ってくるから、次の日に働いても、その賃金はツケの払いに回って手元に入ってこない。だから、また、借り

「ごんぞうたちが、嬢に同情しとる。よく虐めようたくせに、化粧もできんのは酷いと同情しとるんです」

女の歌が途中から男の歌へ変わる。というよりはむしろ、女と男が一緒に歌うごんぞ歌であったのか……

入れ鉄をしながら絹の着物にも金紗の帯にも縁がないと、言い募るように、あるいは諦めたように歌う女の声を、酷い酷いと男の声を受け止める。そして、最後に亭主も嬢も一緒に「アヨイ・コゲヤエー」と声を合わせたものか。

歌詞に刺激されて想像をふくらませながら、ぜひこの歌を聴かせていただきたいと頼むと、野依さんはそうたびたび人に聴かせるものではないと何度も辞退されたあげくに、目を閉じ、静かに歌い始めた。

それは勇猛な男たちの銅鑼声が似合う歌ではなかった。長屋の中から、引き戸一枚を隔てて夜闇の路地にこぼれ出るような微かで、切ない調べである。近代日本の繁栄を支えた人々の、哀しきと望郷の念とが、この調べに乗って平成の時代を生きた人の胸に響く。細く、切なく、響く。

この歌は、風俗や流行よりもっと深くもっと身近な、生活の歌だ。歌える人が残る今のうちに、出来る限りの音源を残し、後世に歌い継ぐべきかと思う。

小倉の紺屋町へ行ったら『ビッグバンド』という一軒にぜひとも寄っていただきたい。数少なくなったジャズのライブハウスだが、ここへ行くと田部俊彦さんに会える。

田部さんとは、出身地小倉を拠点に音楽活動を続けるテナーサクソ奏者にして、この店の経営者だ。東京はおろか、博多にさえ出ようとせず、小倉に根を張って生きてきた筋金入りの人。その音楽人生の全貌を聞こうとやや緊張してお店に向くと、なんと気さくに話をしてくださった。

「僕の音楽歴の最初というと、そうですね、ピアノは幼稚園の頃から習ってましたね。小学生になると発表会ありますよね。あれが演奏活動の最初です。でもね、素質なかったと思いますよ。全然練習もしない。当初は個人レッスンで先生が家に来てくれていたんですけど、僕があんまり言うことをきかないので先生のほうが続かない。3人くらい代わった後は、団地の集会所の教室に通ってましたね」

小学5年生からはボクシングジムにも通い始めた田部少年は、音楽より身体を動かすことのほうが好んだという。そして小学6年のとき、あっさりピアノをやめる。

「教室に持っていく月謝を使い込みましてね。使い道はまあ、その、遊興費。親もね、それほど嫌ならということ。でもそのときお隣の家の姉さんがクラリネットをやっている、それがとても良さげに見えたものだから今度はフルートをやりたいと。中学に入るとブラスバンドに入って、そこからはトロンボーンもしよったですね」

親の言いつけを守っておとなしくピアノを習い続けるお坊ちゃんでない。むしろその逆。ブラスバンド半分、あとの半分は喧嘩ばかりしていたという。

「この中学のブラスバンドにはすごい人が集まっていたね。エレクトーンで世界一になる子がいたり、ペーパートベンが『フィデリオ』というオペラのために書いた「レオノーレ序曲」を小編成に編曲できるような同級生がいたり。この人は近藤君といって、後に東大に入ったくらい頭のいい子。親友やった。彼から音楽の仕組みを教わったのですが、彼が転校したので、後は僕の天下。その頃からブラスバンドを仕切ってたね。音楽がおもしろくなった」

高校時代。日本のフォークやビートルズに出会い、ギターもやったし歌も歌ったが、ジャズについては、当時CMで好評だった渡辺貞夫さんを聴いたくらい。ジャズにハマるのは大学生になってからだだった。

「大学がバラックの部室を取り壊してサークル会館を造るといふんです。いわば学生運動への締めつけなんです。それに対する抗議演奏会をしようということになった。そのときに、集まったみんな、なんか知らんけどジャズをやってたね。部室ほしさにジャズ研を作ったんです」

田部さんは笑いながら若き日を振り返る。自由闊達、怖いもの知らず。楽しいことだけを徹底的にやろう。そんな気分が伝わってくる。『月世界』『スリースター』といった当時流行ったキャバレーのバンドマス

オレ、

東京へは行かん！

文 大竹聡

田部俊彦さん。1954年生まれのジャズミュージシャン。小倉生まれの小倉育ち。小倉から一歩も出ずに音楽ひと筋の人生を固く歩いてきた。毎日の練習は7～8時間。酒量はかなり多い3男の父。

ターに声をかけられたのがきっかけで、バンドでサクスを吹くようになる。

「夜はバイトで稼いで、そのカネでPA（音響機材）を買って大学に持ち込み、学校ではロックをやった。するとPAを持ってない他のバンドが貸してくれと言ってくる。それならいくつものバンドを束ねてコンサートをしようということになり、コンサートのための資金集めは、バンドマンをしていたキャバレーを昼間だけ借りて、そこで学生のためのダンスパーティーを開いて稼ぐ。これが、がっぽり儲かるんよ」

ツインリードギターで有名になったイギリスのロックバンド『ウィッシュユボーン・アッシュユ』や、ホワイトファンクと呼ばれた『アヴェレージ・ホワイト・バンド』などをコピーする毎日。勉強はしない。彼女も作ってはいけん！ 妙な規律のもと、毎日6時間は練習した。

「メンバーには彼女作るなど言いながら僕は彼女を作りましたね。卒業のときは自主制作でスタジオ録音したレコードを300枚プレスしたら、これがあつと言う間に売れて。儲かるかもしれんなあ……」

地元小倉にレコード会社を作る。プロダクションを作る。少し前から思っていたリカならニューヨークだけじゃなくて西海岸もあるのに、なんで日本は東京だけなんやという思いはあつた。けど、メンバーは散り散りになって新しいレコードも作らないわけだからプロとして成り立たない。店も駅前の再開発などがあつて畳むことになった。挫折しとるわけですよ」

田部さんにはすでに結婚しており、『なしか』の事実上の解散からほどなくして最初の子も生まれている。なんとしても、生き抜かなければならなかった。

「演歌歌手などが九州を回る歌謡ショウのバックミュージシャンをして稼いだ時期もあります。『なしか』（北九州弁でなんでだ？の意）というバンド名は残してレゲエをしたり、邦楽の人たちとセッションをしたり、とにかくなんでもやった。でも、どうやって喰えとったんか自分でもわからん」

生活を支えるために作曲したCM音楽は100曲を数えるという。初のソロコンサートを企画した際は、自ら公園や飲食店デパートの屋上などで演奏をしながら宣伝をし、1900枚のチケットを自力で売り切ったという。

一方で、ステイビーワンダーのハーモニカとアルトサクスで共演したり、アンリ菅野と『ブルーノート・フクオカ』にも出演。1998年には初のリーダーアル

とが本当にできる気がした。周囲の人たちは、できるわけがないと言いつつ切った。有名になったら、東京へ行くやろ。本当は行きたいんやろと訳知り顔で言った。しかし田



「エルビス吉川&ピンクキャデラック」の練習風景。バックで演奏するだけではつまらんと、田部さんは2年前からコーラスも担当している。「コーラスおもしろいです。下手やからおもしろいんやろね」とにこやかに笑う。

部さんの胸中では「小倉でやると言ったらやるんだ」という気持ちがあつた。卒業後、キャバレーのバンドマンとしてプロとなった田部さんが『アベベ』というジャズ喫茶を運営していた1981年。自

バム『In A Mist』をリリース。さらには、鳥取県・文化庁主催の「アーティスト・イン・レジデンス」の講師や「第19回国民文化祭」のおがたジャズフェスタ」ではプロデュースを手がけたほか、小倉のビッグバンドジャズの火を消すまじと『ニューアベベオールスターズ』を結成、顧問として後輩の指導にも努めてきた。その間に、音楽プロダクションや貸しスタジオの経営に乗り出し、話は前後するが、一時はITベンチャーを設立したこともある。

なにもかも無手勝流。自分で決めたところに生きる。気がつけば『なしか』の解散から20年以上が過ぎていた。

ライブハウス『ビッグバンド』は現在の場所でも田部さんが経営を引き継いでから来年で10年を迎える。田部さん本人が出演するライブのほか、ゲストミュージシャンによる演奏、さらにはノンジャンル・誰でも参加できるチャレンジライブも開催。音楽の底辺拡大にも力を注ぐ。

中でも楽しみなのが、プレスリーナイトだ。演奏するのは『エルビス吉川&ピンクキャデラック』の面々。田部さんもサクストとコーラスで参加する。取材班が訪ねた日は、ちょうどこのバンドの練習日だった。さりげなく始まった曲目は『Always On My Mind』。吉川さんと田部さんは『アベ

らメンバーを集めたロックバンド『なしか』は、三重県の『合歓の郷』で開催されたライトミュージックコンテスト全国大会で2位に入選。同大会に出た後の『チェッカーズ』や『爆風スランプ』（前身の『爆風銃』）とともに注目を集めた。

「レコード会社が来ました。当時から始まったばかりのインディーズ・レーベルからも話が来た。で、僕は言ったんですよ。東京へは行かん。以前、小倉でやると言うてしもうたから、今さら東京へ行くとは言えん。だから、行かん！と。まあ、僕からしたら、ほら見ろ、前に言うたこと、本当やつたろが……」

田部さんは豪快に笑う。けれどこのときの『なしか』は、地元では週に1度のライブを満席にする人気バンド。コンテストに入賞し、いよいよ東京へ行けるチャンスを掴んだときだった。

「田部さんについてとっても東京に行けん……」

身にしみてしまったメンバーはバラバラになり、東京からも熱く注目された伝説のバンド『なしか』は、事実上消滅するのだ。「今思えば全部浅知恵ですけどね。アメ

べ」時代に知り合った古い友人。プレスリーを始めてから8年になる。

『ブルーグラス』でエルビスを演奏してきた吉川さんは、公務員をやめた後は畑仕事とプレスリーに没頭。最近では、各種燻製作りにも腕を振るいながら、年間20ステージ、エルビスを歌い上げる。素材で柔和な印象のいい声がライブスタジオに響くと、取材陣はインタビュを忘れて聞き入った。

翌日の夜、一杯ひっかけてから出かけたときのこの店も素晴らしかった。常連さんが代わる代わる演奏しながらゆつくりと飲んでる。大人の憩う店であり、子供を大人にする店だと思つた。

田部さんには31歳を筆頭に3人の息子さんが出て立派に成人している。彼らの成長期には、2DKの公団住宅に、田部さんの寝る場所はなかったと笑う。

「質素な暮らしでしたよ。でも、奥さんに一度も文句を言われたことがない。プレッシャーなく、好きなことをやれたのが大きかったですね」

田部さんは毎日、午前中から店を開ける頃まで練習に没頭する。そして、店を開けた後は、閉店までの間にビールなら10本は飲むという。媚びず、威張らず。ただただ愉快に見える。こういう人になりたいと、初めて会った東京モンに思わせる音楽人だ。



文 牧野伊三夫

# 小倉高校の応援歌。

放課後、毎日練習を行う。練習内容は全員で3イニング分の攻撃のときの応援を本番に近づけて行うものと、1人で手のにぎりの具合や突きをの形をチェックしたり、声出しをしたりする自主練習とがある。試合の前には吹奏楽部との合同練習も行う。また、入学してきたばかりの新入

生たちに応援歌を覚えてもらうため3日間行われる応援練習の指揮をとるのも応援団の大切な仕事。新入生たちに高校生としての規律を教える行事でもある。右ページは、夏の甲子園の予選終了後3年生たちが引退して、新しい団長になった2年生の吉田淳悟君。

生徒手帳に記された応援歌。「逍遙歌」「白帆はとぶよ」「白雲去来す」などの歌がならぶ。優勝したときにだけ歌う「優勝歌」もある。平成になって、同校の吹奏楽部出身で応援団の顧問をされていた納富先生によって「スピリットマーチ」という同校のオリジナル応援のための曲も作られた。



逍遙歌  
作詞 山口 憲 彦  
作曲 宮 崎

1. 若草匂ふひろき野に  
陽炎燃えて雲雀啼く  
春爛漫の花の下  
愛宕が丘にうそふかん
2. ユーカリ梢にかけさせば  
白露玉と砕けつつ  
嵐風袂に飄散して  
五雲はめぐる足立山
3. 盛衰榮枯移ろへど  
樹青清き葉の  
流れは永久に絶えずして  
勝山城の涼しづか
4. 全教の長浜もよふけて  
創流遶り傾けば  
玲瓏秋の月白く  
わが学舎を照すなり
5. 嗚呼玄海の潮風に  
琴線強くひびくかな  
冬嶺區松秀づれど  
倉高健児に北べんや
6. 歴史の歴史啼きて  
三歳を此処に集ふとき  
心も高き君が夢  
青春われに光あり

優勝歌

創立百周年記念歌「愛宕の声援」  
作詞 高橋 年 苗  
作曲 小倉高等学校音楽科  
編曲 伊藤 康 英

1. 旗ふ巻いた経典と深め合った絆  
苦学の先には気志の光  
皆大団のように烈をばって  
嵐のように舞い上げ
2. 新たなる改革と永久に続く伝統  
向上を続ける心意氣  
皆大団のように突き進め  
最高の喜びと共に
3. 暖かな信頼と語るぎない友情  
仲間と色鮮と三度の四季と  
皆満月のように夜を照らし  
太陽のように輝いて  
高き夢を駆け  
愛宕の誇りを胸に 夢を駆け

六十五年前、僕の母校の小倉高校は甲子園で二連覇を成しとげ優勝旗に初めて関門海峡を渡らせた。そして今もかわらず、まるで高校野球の伝統を伝えるかのように古風な応援歌を歌い続けている。折しもこの夏、その連覇の優勝投手であった福嶋一雄さんが、甲子園球場で野球殿堂入りの特別表彰を受けた。



母校の応援歌の取材のために、今年の夏、北九州市民球場へ甲子園の予選を見に行った。しかし、球場へ足を踏み入れたとたん取材そっちのけで試合の展開にカッと化した。こんなに母校への思いが強かっただろうか。真上からキラキラ照りつける太陽の日ざしで短パンから出た足に、あつという間にサンダルの焼け跡がついた。とにかく暑い。いくら団扇で煽いても麦わら帽子の中から汗が流れてくる。勝敗の予想は五分五分ときき、母校が序盤リードしていたので、今年はひよっとして、と期待に胸をふくらませた。が結果は逆転負け。甲子園への道は絶たれた。試合終了後に自分腹が立つほど落ち込む。取材スタッフ

と口もきけない。「何であそこでエラーするんかつちゃー!」胸の中で何度も叫ぶ。そんな中、見るからに暑苦しい真冬の黒いツメ襟姿の応援団の生徒たちが激しく太鼓の音を轟かせ、汗を飛ばし、手をぐるぐる回しながら応援をしていた。「ウォオオオオオッ!ウォオオオオオッ!ウォオオオオオッ!ウォオオオオオッ!」

フレックフレック小倉!フレックフレックこくらアアアアアッ!」スタンドに向かって手をのばし、獣のような声で叫んでいる。応援歌は僕が通った頃と全く変わっていない。在校生たちに混ざって応援していると卒業してから、もう

三十年経ったということを忘れてしまう。しかし、それにしても今どき古風な応援歌だと思う。東京でも、よく甲子園の予選の観戦に行くことがあるのだが、こんな応援は見たことがない。流行歌をとり入れることもなく、チャガールもない。軍歌調のメロディと難解な歌詞。敵チームに、すぐにこれが応援歌だと解ってもらえるだろうか、と心配になるほどである。

「白帆はとぶよ大玄海 碧瀾砕け花と散る 正気は凝って吾が腕に 血潮は高なり響くなり」  
「白雲去来す足立山 緒戦にのぞむ倉高の 英姿かがやく若人よ 野望を抱け わが健児」  
観客席の盛りあがりよそに、スタンドのそこだけ時代が止まって異空間を形成することになる。応援歌としてふさわしいかはさておき、高校時代は歌詞の意味も理解できず歌うのが嫌だったのだが、今はこういう歌が引き継がれているのを好ましいと感じている。酒に酔ったときなど、ちょっと口ずさんでみたいと思う。しかし、残念なことに、やはり歌詞が難しすぎて、いまだに出だしのところしか歌えないでいる。母校が甲子園に出ることになったら、何があっても駆けつけるつもりだ。それまでには空で歌えるようになりたい。

商店街で、下駄を買う。

小倉の検番はどのあたりでしたか。花緒をすげると、常盤橋がかかっている。うへいくと、常盤橋がかかっている。

紫川をのぞくと、男の子たちが釣りをしていた。橋が渡す道は、長崎街道の起点。

むかしは川が武士と町人の住む地域をわけ、橋のたもとには宿場もあったという。

小倉駅にむかう京町、船頭町は、昭和三十年代に検番がなくなるまで、花街として栄え、高級料亭や芸者さんの置き屋がならんでいた。

花柳の巷は探せなかったものの、昭和八年創業の酒屋さんがあった。

……わたしがお嫁に来たときは、もう検番はありませんでした。格子のある置き屋さんの家は残っていましたが、昔の感じが残っているのは、お稲荷さんくらい

と思います。

奥さんに教わり、肩をすぼめるような細い路地のつきあたりに、赤い祠があった。

このあたりは火事が多く、火伏せを願う、まつられた。お酒と卵とあぶらが供えられている。水も線香も、けさのものだった。

文 石田千

小梅さん  
からんころん。

く赤坂小梅と小倉節



お狐さまに、よろしくお願いいたします。

柏手をうち、下駄の足もとを見る。ごあいさつをすませ、からんころん。昔ながらの足音で、なつかしい方に会いに行く。

まえに小倉にきたときは、安部嘉郎さんの美容室をたずねた。安部さんは、『北九州SPレコードを聴く会』を主宰されていて、蓄音機で地元の民謡のレコードをたくさんきかせてくださった。

そのなかに、小倉の旭検番の芸者さんから民謡歌手となった赤坂小梅さんのレコードもあった。九州の民謡黒田節、おてもやん、田原坂、久留米そろばん踊りを、全国にひろめた功労者と知った。きれいなあんこ玉が、つるつるころがるような艶と幅のある声音で、いちどきくと、これは小梅さんと覚えらる。

ふたたびたずねた安部さんは、学生時代の先輩のように、ほがらかにむかえてくださった。いまはお店を退いて、お年寄りをたずねて髪のお手入れをなさっている。

……蓄音機を持って行って、SPレコードをかけると、みなさんとても喜ばれるん

安部嘉郎さん愛蔵の「小倉節」。レコードの主原料は、シェラックというカイガラ虫。竹の針は、音色がやわらかく、レコードをいためない。



小倉旭検査で活躍したころの、おきょうな小梅さん(右)。

です。新婚時代とか、ふるさとでみんなが聴いたことを思い出して涙ぐまれたり。思い出は、脳を活性化するんですよ。

古い部品を集めて製作された大型蓄音機アベノフォンで、小梅さんのデビューレコードをさく。安部さんは、映像プロデューサーの増永研一さんにも声をかけてくださった。増永さんは、二〇〇七年に小梅さんの生誕百年記念の映画『小梅姐さん』を製作され、安部さんとは音源の提供を通じて親交がうまれた。

本名は、向山コウメ。明治三十九年四月二十日、福岡県田川郡川崎町に生まれた。父の権平は、雑貨店と仕出し宴会の店を営んでいた。母志奈は、三男六女の末っ子コウメを出産して十日後に亡くなり、長姉

それがはじめての収入でした。

ちいさな女の子の歌声に、大人が聞き惚れる。猛者の集まる炭鉱の町は、無邪気な星がうまれた場所だった。

蓄音機アベノフォンの朝顔の花びらは、六枚。ケント紙で型をとり、上質の和紙を重ねていき、ニスで仕上げる。安部さんは、わきにあるハンドルのまわす。サウンドボックスに竹の針をつけ、レコード盤の溝にのせる。SPは、スタンダード・プレイングの略とはじめて知った。

……一分間七十八回転、録音される長さには、三分前後。なんでも三分を目標に録音したから、三分間芸術といわれました。

小倉西へ行きや筑前博多 思ひ出したら  
ハア ソコヤント  
サア またおいで  
仇し雨でも安部山の桜 只の一夜で  
ハア ソコヤント

サア 色がつく  
野口雨情作詞、藤井清水作曲『小倉節』は、昭和四年、小倉を代表する民謡がほしいという小梅さんの願いを、野口雨情と藤井清水が



飲みっぷりも、芸のうち。盥洗をおちこがわりにしていたころもあった。

次姉をお母さんがわりに育つ。次姉は、実家のむかいで髪結いさんをしてきた。その環境もあり、安部さんのお母さんとは、とくに親しかった。

……小倉にいたころは店も検査のそばにあったから、毎日髪を結いに来ていましたね。母とは一歳違いで、炭鉱に近い遠賀川流域の育ちでしょうし。

川筋気質っていうんですが、男は気が荒く、女はきつぷがいい。じぶんの家みたいに、こんには小梅ですって店に来て、坊っちゃんお母さんはって聞く。いつも、なんて大きなおばちゃんやって思っていました。美容室の椅子にすわるとはみだすし、畳にすわると一畳を占める。

芸者さんの島田の髪は、ワセリンを混ぜたびんつけ油ですいて、結う。びんつけ油の甘い匂いに包まれて育った坊ちゃん。安部さんは、おばあさんから四代目の髪結いさんとして、店を盛りたてた。

増永さんは、映画のために、一年間取材をされた。

……ご実家は、甥御さんが食堂をしています。お父さんは、草相撲の勧進元をする

受けとめて製作された。本日は、昭和四年大阪ビクターレコード社の盤。オーケストラと三味線をしたがえ、歌詞の二番までを一発収録している。

胸、のど、頭上から、みずみずしい声があふれている。広い音域の厚みは安定していて、中音部はことにすこみがある。ソコヤントサア、意味をもたないお囃子に、ことさらの情感をこめている。粒のそろった小節は、西洋音符という装飾音符をみつつもよつつもつけ、みごとに着地している。

安部さんは、オペラやカンツォーネのような頭鳴の声を出せるひとだった。そして、世に出たのは、レコードよりもラジオの功

ような、遊び好きなひとだった。川崎は英彦山の修験者がおりてくる町で、家のまに水をくんでおくと、真冬でも頭からかぶったそうです。それを見た彼女は、信念ある人間はどこまでも我慢するものだと思っていた。娯楽のないころですから、毎日英彦山のふもとにいつて歌うと、炭鉱で働く男たちが喜んで聴く。鉱夫たちは、つぎの山に移るときにお礼にとお金をくれた。



旭検査芸者衆の勢ぞろい(後列左端)。梅若と名のっていたのは、八幡・小倉の8年間。

績が大きいと説明された。

……大正十四年にラジオ放送がはじまると、レコード業界は大反発をしたんです。無料で音楽が流れたら、レコードが売れなくなる。ところがいざ始まってみると、全国津々浦々に歌がひろまり、レコードはかえって売れるようになった。そのなかでも、歌いやすく親しみのある民謡は、とくに売上げがのびた分野でした。

世界に通じる郷愁を表現できる歌い手ですよ。増永さんが聴き入る。いまは、映画がきっかけで小倉節の会を始め、歌詞の解釈を深めようと試みていらっしやる。

……二番の歌詞の安部山ですが、野口の作詞では中原(なかばら)だったのを、小梅さんが変えて歌っている。思ある野口の詞を、変えたのはなぜだったのか。それから、ひと晩で色のつく桜というのも、調べたらあるんですね。

平成19年からは、小倉節の全国大会が開催されている。小倉節の会は、小梅さんの願いと、八十五年の歴史を、小倉のひとに知ってもらおうと結成され、映画で小倉節を歌われた三

# 小倉節

作詞／野口雨情、作曲／藤井清水、歌／赤坂小梅

小倉西へ行きや筑前博多 思ひ出したら

ハアソコヤントサア またおいで

仇し雨でも安部山の桜只の一夜で

ハアソコヤントサア 色がつく

ここは櫓山向こうは長門 沖の彦島は

ハアソコヤントサア 会(あい)の島

見たか聴いたか小倉の祇園 若衆の太鼓で

ハアソコヤントサア なりみびく

おまへ旅の衆かわしや旅がらす いやで小倉は

ハアソコヤントサア 去りやしない

云うも泪よ聴いてはくれな 云うに云われぬ

ハアソコヤントサア 訳がある



味線奏者の本條秀太郎さんの演奏会を計画している。

思い出したら、またおいで。

永遠の美声に、またひとが集う。

翌朝は大雨、発車の笛が、雷鳴に消される。日田彦山線は、香春駅が近くなると、霧をまとう山がせまる。

一山二山三山越え、奥に咲いたる八重樫炭坑節にうたわれた三重の山、香春岳。いちばん手前の一ノ岳は、石灰石の採掘でひらくたくなっている。

豊前川崎の駅でむかえてくれた川崎町のキヤラクターは、小梅ちゃん。梅の着物がかわいらしい。寒暖差のある盆地は、水源にめぐまれ、お米とくだものがおいしい。とんぼとすれ違い、商店街のひとつうしろの古い道にはいと、駅と炭鉱をむすぶレールの跡があった。柳の太木と、お稲荷さんがある。参道が雨にぬかる。柳とお狐さまは、むかしの音や匂いを覚えている。

鉾山が開くと、会社は、従業員と家族に必要な環境を整備する。学校、病院、娯楽は芝居小屋、映画館ができる。昼夜なく働く鉾夫たちをなぐさめる花街も、にぎわう。向山食堂は、駅から歩いて十分ほどの、餅田交差点にある。昼どきでこみあい、出前の電話がつつぎに鳴る。名物小梅うど



昭和7年、長唄の師匠だった杵屋勝松と世帯を持つ。

者さんを斡旋する仕事)のおじさんが、声をかけた。

……あんた、そんなに歌が歌いたいか。芸事が好きか。だったら、芸者にならんか。

かわいがってくれたお姐さんに憧れていた少女は、母がわりとなつている姉たちを説得し、八幡の置き屋稲本で世話に

なることが決まる。

大正十二年、生活に苦勞のない家の末娘向山コウメは、念願の芸者梅若となる。けれども、家業を継いでいた兄に勘当を申し渡され、家を出た翌年に亡くなった父の葬式にも、出られなかった。

アルバムの写真は、ほかの芸者さんより島田半分ほど背が高い。修業はつらく、鉄道自殺もはかったと、のちに明かしている。……気持ちの上で行き詰まっちゃった。

線路に寝てたら、ふっと顔にそよ風があたりような気配がした。はて何かな?と顔をあげたとたん自動車ゴーツと通っていった。もう二度と線路に寝る気にはならなかったですね。死神が離れていったんでしょうね。



川崎町の町制20周年祝賀行事にて、『黒田節』『おてもやん』をはじめ、数多くの九州民謡を全国にひろめた。

若い梅若さんは、はればれ元気いっぱい  
に小倉の暮らしを満喫している。

紫川では島田に着ものでボートをこぎ、  
若い学生さんたちと足立山あだちやまにのぼり、お座  
敷からそのまま韓国釜山まで出かけた。

そうして昭和四年、いくつか苦い恋も  
して、男と競馬にもほとほと懲りたのが、  
二十三歳のとき。

料亭津田倉に、新民謡の作詞、作曲家と  
して活躍する中山晋平なかつましんぺい、野口雨情、藤井清  
水らの宴席がもたれ、梅若奴は、小倉一の  
美声芸妓と呼ばれた。

器量と色気はほかにもいるが、唄気と飲  
み気食い気は、べらぼうに強い。民謡の研  
究に熱心だった作曲家藤井清水が、梅若の  
声に惚れこんだ。宴の三日後、梅若のもと  
に手紙が届く。レコードに吹き込みません  
か。その晩の縁が、小倉節の録音と、東京  
進出へと続く。

向山食堂には、小梅さんの写真と二枚の  
賞状が飾られていた。紫綬褒章と勲四等宝  
冠章。紫綬褒章には、多年歌手として精進  
し独自の芸境を開拓してよく歌謡の発展に  
寄与し事績まことに著名とあった。

ゆたかに結われた島田すがたを仰ぎ見て、  
夕暮れの小倉にもどった。

駅前駅前の路地に入ると、みぎから左からの  
れんが誘い、下駄くだもからんころんと迷う。



コロムビア入社30年記念の歌舞伎座リサイタルは、親  
交の深い役者たちとの豪華共演だった。

酒は呑め呑め、小梅さんの加勢で、いつ  
もより飲める気がする。糠ぬかいわしと、お酒  
店のおかみさんは、子どものころ、小倉に  
帰ってきた小梅さんを駅まで見にいさまし  
たと、お酒をついでくれる。

帰る朝も、雨。宿の窓には足立山がある。  
やっぱり安部山を見て帰ったかった。

桜並木の坂をのぼった安部山公園には、  
桜園の開墾者、安部熊之輔あべくまのすけ徳碑が建ち、

恩師藤井清水の教えと、慰問先でふるさと  
の歌に涙を流すひとたちを見たからという。  
第一回紅白歌合戦では、長野民謡『浅  
間の煙』、第四回と六回は、『おてもやん』、  
七回には『炭坑節』で出場をはたした。戦  
後は再婚にも恵まれている。

小梅さんは、音感が抜群で、方言のつか  
み方が早かった。旅さきでは、かならず検  
番を訪ね、芸妓さんに会う。長崎では、名  
妓愛八をたずねて『長崎ぶらぶら節』を  
習っている。土地の古老や研究家に、手と  
り、足とり、口うつしで教わる。

言って、聞かせて、  
して見せて。下地時代  
に習った勉強法でなる  
べく正調に近づけ、さ  
らに独自の小梅節こめせつに作  
りあげて世に出した。  
ことに福岡民謡黒田節  
は、黒田節といえど赤  
坂小梅、赤坂小梅とい  
えど黒田節と評された。  
猛勉強を華で隠し、  
ちいさな出会いものち  
の深縁と、大切にす  
るひとだった。

昭和五十六年、国立  
劇場にて引退公演。



引退後は、平成4年に亡くなるまで、民謡の指導、  
普及につとめた。戒名は、芸鏡院梅月靈峰大師。

ひと待ち顔の子猫が、雨宿りしていた。

昭和六年、二十五歳の梅若は、地元出身  
の後援者清水行之助に励まされ、上京する。  
東京赤坂の置き屋若林に籍が決まり、藤井  
清水のすすめで赤坂小梅に名を改める。最  
初のヒット曲は、昭和八年、久保田宵二作  
詞、古賀政男作曲『本当にそうなら』。

たとえ火の雨 槍の雨  
月が四角に照ったとて  
好いて好かれて紅紐の  
解けぬ二人は 縁結び  
ほんとにそうなら うれしいね

同時期に売り出した浅草検番の市丸、浜  
町検番の小唄勝太郎とともに鶯芸者三羽鳥  
と呼ばれ、上京二年後には置き屋梅若林の  
女将となり、長唄の師匠杵屋勝松と結婚  
軍人財界人の信があつい後援者清水の座敷  
に呼ばれ、御鬘ごまきが増える。

初舞台、台湾遠征へと活躍を広げるさな  
か、花柳界も戦時色が強まり、戦地前線へ  
の慰問活動が増える。そして昭和十四年、  
慰問先の満州に、夫病死の訃報が届く。悲  
しみをこらえて、ほんとにそうならうれし  
いねと歌った。

東京大空襲で、赤坂の置き屋も全焼。こ  
のときも、戦火のなか助けられた恩にこた  
えようと、すぐにラジオに出て歌った。

戦後は、古い民謡の採集と録音を続けた。

た。小倉に出るときも、東京に出るときも、  
小梅さんは儲け話に目もくれず、恩あるひ  
との声のするほうを選んでいく。

雨の安部山から、妙見神社までのぼって  
いく。

……山は小倉の足立山や八幡の帆柱山ほむじやまね。  
／着物のすそをしりっぱしよりにしてどん  
どんのぼる。頂上に立った時の気分がなん  
ともいえません。六連の沖を朝鮮通いの関  
釜連絡船が、白い航跡を残して、やがて遠く  
玄界灘げんかいなだへと船影が消えていく。何度見ても  
飽きない光景でした。

とおい昔、民謡は  
船にのって運ばれた。  
港で遊んだ船乗りは、  
歌をみやげに故郷に  
帰り、その土地の唄  
としてなじんでいっ  
た。

川筋育ちの赤坂小  
梅さんは、生涯歌の  
小舟をこぎ、日本じゅ  
うの港をたずねた。  
下駄を放れば明日  
は晴れ。小梅さんの  
いうとおり、何度見  
ても飽きない、青い  
海が見える。

\*1・本條秀太郎さんの演奏会は、平成26年1月30日に開催。  
写真提供=向山家/映画「小梅姐さん」製作上映委員会 取材協力=「北九州SPレコードを聴く会」安部嘉郎/川崎町観光協会  
参考資料=「西日本新聞」昭和56年掲載・聞き書きシリーズ『玄海灘に向かつて』

祇園祭は戸畑の正月。盆暮れに帰省しないのに、夏の戸畑祇園には帰って来るといふ土地っ子も少なくない。この祭りは、土地の暮らしの核心である。

現在の戸畑区内の、東、西、中原、天籟寺という4つの地域から、昼は12本の幟を立てた幟山笠、夜は化粧直しをした提灯大山笠が出て、それを屈強な男たちが担ぎ、街中を練り歩く。これはお祭りであり、伝統的な神事である。

戸畑に生まれた男は、子供山笠に参加する幼少期から祭りに親しみ、中学生になると小若山笠を担ぎ、高校生からは成人に混じって大山笠の担ぎ手となっていく。

北交大和タクシーにお勤めの岩崎隆幸さん(54)もその一人だった。中学時代にはすでに大山笠を担ぎ、早くから祭り全般に関する仕事に従事し、現在は中原地域で、総代表を支える「中老」の役職にある。

「兄貴のやったことを真似て、兄貴の背中を追いかけてきただけです」

お兄さんというのは4歳年上の稔さんのこと。岩崎さんには他に姉が4人いるが、岩崎さんにとって稔さんは、父親代わりだったという。

「会社勤めをしていた父親は身体が弱く、入院したり、休職したりしていたので、僕ら兄弟は早くからアルバイトをしてきまし

た。世の中というのはときに、純情で一本気な男を選んで、謂れなき酷い仕打ちを受けさせることがある。稔さんは、若くして身体を壊したのである。

「兄の酒は、ひとりで飲む酒。みんなと楽しく飲むより、ひとり静かに飲むことを好んだ。私のことも馴染みの店には連れて行かないくらいでしたね。気の使いすぎというのかな。酒自体は、あまり強いほうではなかったかもしれない」

享年48。急死に近かった。40代は若すぎる。せめてあと20年は生きてほしかった。岩崎さんに、そんな思いが残った。

それから4年が経ち、岩崎さんは、稔さんの死んだときの年齢を迎えた。

兄貴のために、何かしたい――。

岩崎さんは考えた。稔さんの思い出は数々あるが、そこから何を残すべきなのか。そうして思いついたのは、やはり、祭りであり、祭りを彩る土地の歌だった。

「2000年以上の歴史を誇る祭りは、今後も戸畑祇園として継承されていくだろう。でも、歌は放っておけば忘れられてしまうのではないか。テープに録っておいても、

た。兄貴が牛乳配達をして授業料を払い、高校を卒業すると、今度は私がそのアルバイトを継いで、やはり授業料を払って高校を出たんです」

不遇であることを恨んだか。岩崎さんには、やんちゃをした時期があった。

「高校生の頃です。このときは兄貴に殴られてましてね。頭の周りに星が飛ぶのを、初めて経験しました」

たった4歳違いだが、兄弟の間にあったのは喧嘩ではなく、父代わりの兄が弟をきつく叱るという事実だけだ。成人してから

は、大人の男同士としての付き合いをしてきたという。

ただひとつ、戸畑祇園に関してだけは、2人の間に常に厳然とした上下関係があったという。祭りにおいても、岩崎さんは稔さんの背中を追いかけて続けたのだ。

戦後、一時途絶えた中原の祇園を復活させようという動きがあったときに、率先して活動を牽引したのが中原の山口さんという家だった。この山口家の息子さんと稔さんが同級生だったことで、稔さんは祭りにのめり込んだ。のめり込めば家庭や仕事に

## 戸畑の歌は兄の歌。

文 大竹聡



戸畑区天神にある、銘菓「戸畑音頭」の製造元「まつ屋」さんの店先に会社の車を停めてにっこり。筑豊や小倉にも銘菓は数あれど、戸畑っ子ならやはりこれ。お使い物に、お土産にと重宝がられ、差し上げた人がきっと喜ぶ饅頭だ。

テープはやがて擦り切れ、歌もなくなるのではないか。そう考えたんです」

戸畑の、北九州の、古い歌を残そう。岩崎さんの胸に、亡き兄の思い出ばかりでなく、土地に伝わる歌、この土地に暮らしてきた人々が愛した歌を残したいという大きな夢が芽生えた。

自分が、稔さんの死んだ年齢である48歳のうちに、戸畑の歌をCDにしたい。目標を定めた岩崎さんは、『北九州音頭』(歌・江利チエミ)をはじめ、『戸畑音頭』、『THE CHOCHEINYAMA』、『戸畑山笠 炎の祭り』の4曲に絞り、レコード会社や音楽著作権協会などの権利関係の調整をしながら、CDへのプレス作業を東京の業者に依頼した。

どうせ作るならちゃんと歌詞カードも入れたい。そう思って手配をすすめると、歌詞にも著作権料がかかることがわかった。何もかも初めて。手探りで進めたCD制作にかかった費用は、合計で100万円以上の高額になった。

「これはカミさんが用立ててくれたんですよ。どこからともなく、ポンと出てきた」

岩崎さんはそう言って笑う。CDのタイトルは『戸畑温故知新』。稔さんの好きだったものや、稔さんとの大事な思い出にちなんだタイトルには、あえて

しなかったようなのだ。

「あれらの歌は、北九州市民の財産であり、北九州の文化だから、私ひとりの宝物にしたのではもったいないと感じたのです」



兄を思い、故郷を思って自主制作したCD『戸畑温故知新』。ジャケットは、戸畑と若松を結ぶ大橋と今も市民の足となっている渡船。永久保存版CDにはまだ若干の在庫がある。

ない。

CDの完成まで、1年半を要した。48歳のうちにと思っていた岩崎さんは、49歳になっていった。

そして『戸畑温故知新』が完成し、戸畑に届いた日――。「ラジカセを持って、墓へ行きました」

できたばかりのCDの包装を解く間もどかしいとばかりに気持ちの急く岩崎さんが、容易に想像できる。

オヤジ、兄貴、戸畑のな、北九州のな、歌のCD作ったんよ。今聞かせちゃるけん……。

岩崎さんは胸を詰まらせ、声にならぬ声を上げながらCDの再生ボタンを押したのではないか。閉じた瞼の裏側に見えたのは、父の笑顔か、法被姿の兄の勇姿か。それともふたりの、後ろ姿か。

後日、岩崎さんは『戸畑温故知新』の完成を知った知人から、声をかけられた。

「誰でもできることじゃないよ。君は、いいことをしたね」

無心でCDを作った岩崎さんにとって、身体が震えるほど嬉しい一言だった。

## 歌えや踊れ

### ご当社ソング①

シャボン玉石けんCMソング

### シャボン玉石けん

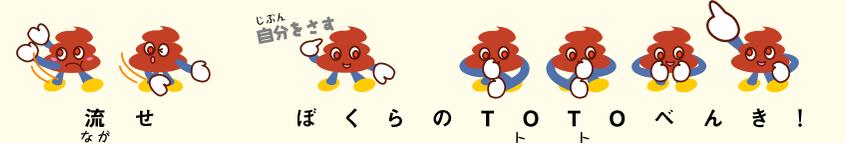
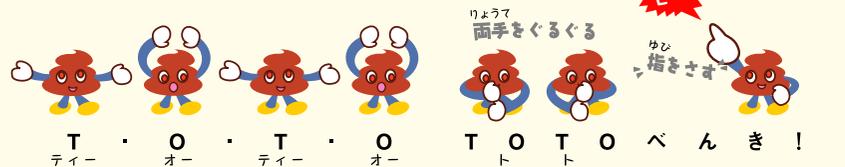


CMソングの誕生は1975年。以来、歌い手や曲調を変えながらも、途切れることなく放送され続けているたった4小節の歌には、シャボン玉石けん株式会社の信念や未来がギュッと閉じ込められている。歌と共に生まれたキャラクター・シャボンちゃんのモデルは、シャボン玉石けん前会長の森田光徳氏の娘さん、当時0歳。CMのシャボンちゃんは表情豊か。曲の始まりに「青いお空がほしいのね」と涙を流したかと思ったら、シャボン玉を吹いた途端、幸せそうな笑顔を浮かべる。そのシャボンちゃんも、いまや、育ち盛りの子どもをもつていてもおかしくない大人の女性に成長したはずだ。放送が始まった時代は、合成洗剤が普及し始めた経済成長期。美しい環境と私たちが体を守る石けんをスローガンに奮闘していた森田氏は、子どもらが吹くシャボン玉がのぼっていくお空は、一点の曇り無い青さをたたえていなくてはいけないと強く心に誓い、作詞したのかもしれない……と、大人になったシャボンちゃんのひとりとして思うのである。

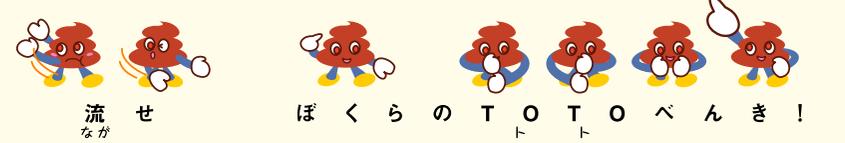
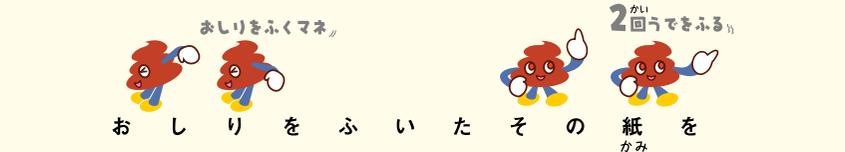


うた：坂田 おさむ  
コーラス：こすもすダンスファミリー

うんちと一緒に踊ろう！歌おう！



※「ながーい」、「べちゃべちゃ」など言葉にあわせてふりつけを考えてみよう!!



＜2曲目以降もこんな感じでどってみよう!!＞



TOTO 夏まつりへの出演を控え、リリリで最後の練習にのぞむ子どもたち。元気いっぱいいきおいよく流しています。小倉北区「れんげの花保育園」にて。

歌えや踊れ  
ご当社ソング ②

TOTO

「じつはこの歌、オリジナルがいつ、だれによって作られたか分かっていないんです。もちろん社歌は別にございます。そう言っ  
てTOTO本社・広報担当の女性が微笑む。  
一瞬の沈黙。「ととべんき」とはつまり  
「TOTO製便器」のことですよ？ であ  
は、いったいだれが何のために、流しせ・  
流せと歌ったのでしょうか？  
20年以上前から、ポイイスカウトや学校  
のレクリエーションの場で、振り付きで歌  
い継がれてきたという通称「ととべんきの  
うた」。関西以西で育った、ある年代（お  
そらく30代前半まで）は、この歌を耳にす  
ると懐かしく思う人も少なくないらしい。  
頼まれてもないのに社の製品を歌って  
くれた方に敬意を表してか、TOTOは  
2002年にCDを自主制作した。その  
後、プロによる編曲・レコーディングを経  
て、歌は正式に世に出ることとなった。  
子どもをもつお母さんたちからは、「歌  
を聴かせたらトイレに行くのを恥ずかしが  
らなくなった」などとうれしい声が届いて  
いる。そして今、TOTO主催、恒例の  
夏祭りでは、園児たちがダイナミックに歌  
い踊る姿が夏の風物詩となっているのであ  
る。



東シナ海を北上しながら着々と北九州方面へ近づいてきた台風15号が、上陸を目前に温帯低気圧へと変わった朝。約束の場所、門司区にある和布刈埠頭へ急いだ。雨脚は一向に弱まらず不穏な風が吹いている。「関門海峡合唱団」は集まってくれるのだろうか。目の前の波立つ早瀬瀬戸を見て、いよいよ覚悟を決めた。

待ち合わせの時間。心配は吹き飛ばす。27人もメンバーが集まったのだ。傘をさし霞がかかった海峡の前に立つ。タクトの合図で、オリジナル曲「関門の歌声」（作詞：作曲、牟田裕）が流れた。

「関門海峡を挟んだ両岸で、5千人のコーラスを実現したい。下関と門司、お互い同じ海を見て育った者同士の歌声がハーモニーとなって届きますように」

地元で音楽家や有志メンバーで始めたプロジェクトへの思いは、対岸へと続く関門橋のごとくまっすぐだ。自分の歌声が一助になればと、活動に賛同し、合唱を経験したことがない市民も集まってきている。

活動を始めて1年。歌声は見えない道となつてぐんぐん伸びている。先日の挑戦で、初めて対岸へ声が届いた。門司と下関を結ぶ海上の道は直線距離で600m。嵐を物ともしないこのメンバーがいれば、歌声はこれからも大きく膨らんでいくに違いない。

# 海峡は歌の道。

文＝つるやももこ



## 関門海峡合唱団

合唱団のテーマは「海峡に歌声の虹を架けよう」。2012年8月に、門司区在住の音楽家、牟田裕さんの呼びかけで始まったプロジェクトは、同じく市在住の音楽家、荒田砂代子さんとみやこさんと、下関在住のロック歌手・美濃部隆さんや他の有志も加わり、現在に至る。ふだんは、下関と門司港で別々に定期的に練習を行っている。

# こんなにあります、北九州の歌。

監修=安部嘉郎(北九州SPレコードを聴く会)、入江公子(スナック銀杏)

1929	<b>小倉節</b> <p>作詞／野口雨情　作曲／藤井清水 歌手／赤坂小梅</p>	1934	<b>北九州小唄</b> <p>作詞／阿南哲郎　作曲／奥平志津雄 歌手／赤坂小梅、丸山和歌子</p>
1930	<b>鎮西小唄</b> <p>作詞／野口雨情　作曲／中山晋平 歌手／藤本二三吉</p>		<b>門司港祭り</b> <p>作詞／北川黎子　作曲／佐々紅華 歌手／赤坂小梅、伊藤久男 他</p>
	<b>関門小唄</b> <p>作詞／門司毎夕新聞　作曲／中山晋平 歌手／藤本二三吉</p>		<b>バナナ音頭</b> <p>作詞／バナナ宣伝　作曲／村田良一 歌手／赤坂小梅</p>
	<b>門司市歌</b> <p>作詞／山田文夫　作曲／岡野貞一</p>		<b>若松小唄</b> <p>作詞／河原重巳　作曲／常盤津操太夫</p>
	<b>八幡小唄</b> <p>作詞／北原白秋　作曲／町田嘉章 歌手／川崎豊・八幡中央券番芸妓連</p>	1935	<b>小倉市歌</b> <p>作詞／永井幸次　作曲／内山哲也 歌手／井上貫也 他</p>
1931	<b>鉄の都</b> <p>作詞／北原白秋　作曲／町田嘉章 歌手／八幡中央両券番芸妓連</p>		<b>小倉市行進曲</b> <p>作詞／百済文輔　作曲／山内常光 歌手／井上貫也 他</p>
	<b>若松小唄</b> <p>作詞／鶴山美雪　作曲／杵屋弥寿彦 歌手／朝居丸子</p>	1936	<b>八幡メロディー</b> <p>歌手／楠木繁夫</p>
1932	<b>小笠原音頭</b> <p>作詞／阿南哲郎　作曲／奥平志津雄 歌手／三島一登</p>		<b>八幡行進曲</b> <p>作詞／松尾要一郎　作曲／古関裕而 歌手／松平晃</p>
	<b>小倉小唄</b> <p>作詞／平山芦江　作曲／歌沢寅由香 歌手／旭券番　愛太郎、藤山一郎</p>	1937	<b>八幡市歌</b> <p>作詞／八波則吉　作曲／矢野勇雄</p>
	<b>小倉勝山小唄</b> <p>作詞／長田幹彦　作曲／松平信博 歌手／市丸</p>		<b>若松市歌</b> <p>作詞／安武新　作曲／弘田龍太郎 歌手／東海林太郎</p>
	<b>小倉情緒</b> <p>作詞／中内蝶二　作曲／杵屋佐吉 歌手／小倉町勝長二</p>		<b>若松港祭りの歌</b> <p>作詞／阿南哲郎　作曲／阿部武雄 歌手／浅草ノ香</p>
1933	<b>河内小唄</b> <p>作詞／高橋陶村　作曲／松雄勇 歌手／松山時夫</p>	1938	<b>小倉市歌</b> <p>作詞／内山哲也　作曲／永井平次</p>
	<b>門司小唄</b> <p>作詞／老川林平　作曲／内海葉那 歌手／広瀬彌子</p>	1942	<b>海の底さえ汽車は行く</b> <p>作詞／坂本正雄　作曲／大久保徳二郎 歌手／東海林太郎、塩まさる、服部富子、小笠原美都子</p>
	<b>新門司音頭</b> <p>作詞／門司音頭会員　作曲／山田竜太郎 歌手／分山田和香</p>	1944	<b>ああ野辺軍曹</b> <p>作詞／宮城正俊　作曲／林伊佐緒 歌手／（軍歌）</p>
	<b>ああ高木軍曹</b> <p>作詞＋作曲／谷口藤吉 歌手／（軍歌）</p>		

1947

**さあさ復興**

作詞／上田一人　作曲／古賀政男

歌手／霧島昇 他

**街は明るく気は軽く**

作詞／宮原正一　作曲／明本京静

歌手／近江俊郎 他

1948

**門司港音頭**

作詞／戸枝、安永　作曲／大村能章

歌手／白川みゆき

1949

**男・無法松**

作詞／石田喜代夫　作曲／中野しげる、利根一郎

歌手／東海林太郎

1950

**小倉音頭**

作詞／山田繁雄　作曲／古賀政男

歌手／赤坂小梅、伊藤久男、鶴田六郎

1951

**八幡音頭**

作詞／島田芳文　作曲／大村能章

歌手／瀬川伸、照菊

**新八幡小唄**

作詞／山田繁雄　作曲／大村能章

歌手／林伊三緒

**製鉄所 50 周年記念歌**

作詞／くろがね会　作曲／飯田信夫

歌手／柴田睦隆 他

**八幡くろがね音頭**

作詞／米満義行　作曲／中山晋平

歌手／市丸 他

1952

**戸畑音頭**

作詞／原善磨　作曲／利根一郎

歌手／市丸、鈴木正夫

**山笠マンボ**

作詞／福島佑禎　作曲／寺岡真三

歌手／生田恵子

**八幡連合婦人会歌**

作詞／有吉正勝　作曲／坂本不二夫

歌手／林伊三緒

**八幡連合婦人会音頭**

作詞／森永苗流　作曲／平井潤衛

歌手／津村謙 他

1957

**戸畑市歌**

作詞／加藤参郎　作曲／古関裕而

1958

**無法松の一生**

作詞／吉野不二郎　作曲／古賀政男

歌手／村田英雄

1960

**招く小倉博**

作詞／小林潤　作曲／原賢一

歌手／小林潤 他

**新八幡音頭**

作詞／阿南哲郎　作曲／細田義勝

歌手／赤坂小梅、若山彰

1960

**帆柱山の唄**

作詞／野口雨情　作曲／上原げんと

歌手／森繁久弥

1961

**ああ白洲灯台**

作詞／中村幸夫　作曲／福島一見

歌手／村田英雄

1962

**愁風小倉城**

作詞／原田茂安　作曲／船村徹

歌手／村田英雄

**若戸大橋音頭**

作詞／山田繁雄　作曲／ダニー飯田

歌手／藤島桓夫

**洞海旅情**

作詞／岡本淳三　作曲／鎌多俊与

歌手／松山恵子

**輪になって (門司)**

作詞／服部良一　作曲／小林栄蔵

歌手／藤山一郎

**花と龍**

作詞：滝田順　作曲：伊部晴美

歌手：石原裕次郎

**花と龍**

作詞／水木かおる　作曲／小池青磁

歌手／大木伸夫

1963

**北九州市歌**

作詞／平尾一男　作曲／長谷川良夫

歌手／RKB 合唱団

**北九州音頭**

作詞／岩本宗二郎　作曲／神津善行

歌手／江利チエミ

**北九州盆歌**

作詞／原田茂安　作曲／古賀政男

歌手／村田英雄、島倉千代子

**太陽の街**

作詞／佐伯孝夫　作曲／吉田正

歌手／橋幸夫

1964

**花と龍**

作詞／二階堂伸　作曲／村田英雄

歌手／村田英雄

1967

**三萩野ブルース**

作詞／深津武士　作曲／大沢浄二

歌手／白根一男

1968

**小倉音頭**

作詞／原田茂安　作曲／山本文晴

歌手／村田英雄

1973

**花と龍**

作詞／藤田まさと　作曲／古賀政男

歌手／美空ひばり

1981

**新しき八幡**

作詞／土屋正仁　補作詞／志摩海人

作曲／前田憲男  
歌手／藤山一郎

1986

**北九州・どっこい節**

作詞／橋本嗣史　作曲／曾根幸明

歌手／金沢明子

1987

**あばれ太鼓**

作詞／たかたかし　作曲／猪俣公章

歌手／坂本冬美

1988

**燃えろみんなの北九州**

作詞／石原一輝　補作／喜多條忠

作曲／美樹克彦  
歌手／日野美歌

1991

**紫川情話**

作詞／勇福子　作曲／城賀イサム

歌手／三条正人

1995

**門司港驛**

作詞＋作曲／吉田和則

歌手／大川博巳・遠藤理恵

**紫川**

作詞／よしひろし　作曲／田川祐介

歌手／黒田武士

1996

**門司港レトロ音頭**

作詞／吉田清春　作曲／吉田和則

1999

**芙美子サンバ**

作詞／吉田清春　作曲／吉田和則

歌手／吉田尚子

2002

**小倉の夜**

作詞／武美八郎　作曲／森山輝生

歌手／永山弘二

2008

**新北九州空港**

作詞／吉田清春　作曲／吉田和則

歌手／山本譲二

2010

**人力車音頭**

作詞：吉田清春　作曲：山本譲二

歌手：山本譲二

2010

**焼きカレーのうた**

作詞：吉田清春　作曲：山形公規

2011

**ひまわりの花**

歌手＋作詞＋作曲／富永裕輔

2012

**いいつちゃええっちゃ北九州**

～未来への絆～

作詞／保安直樹

補作詞／わっしょい百万夏まつり振興会

作曲／大内義昭　編曲／有田宏・大内義昭

歌手／ハルカミホ　コーラス／大内義昭

**製作年不詳**

**戸畑山笠・炎の祭り**

作詞／浜田良美　作曲／今村弘祥

歌手／浜田良美

**THE CHOCHINYAMA**

歌手＋作詞＋作曲／浜田良美

**門司港祭り音頭**

**関門旅情**

**門司音頭**

**九州線唱歌「汽車」**

作詞／大和田建樹　作曲／田村虎蔵

**思い出の北方線**

歌手／葉月ジュン子

　明治から昭和30年代までのSPレコードの収集家である安部嘉郎さんと、故郷を歌った歌謡曲や市内の校歌が歌えるスナック『銀杏』の入江公子さんの

全面協力・監修のもと、このたび「北九州を歌った歌リスト・雲のうえ版」を制作。すると、ひとつの街を題材にしてこんなにもたくさんの物語が歌い継がれてきたことが判明した。

　安部さんは、「合併以前の小倉・戸畑・門司・八幡・若松市、それぞれが産業や文化において特徴を持ってがんばってきたのが北九州市です。5市の特長

があったからこそ、それが地名と結びついて、たくさんの歌が生まれたのでしょう」と話す。

　いっぽうで、歌に合わせてカラオケ映像を自作する入江さんは、「北九州市には海や山、いい景色がたくさんあるでしょう。昔の歌を聴いて、その時代の景色がどうだったかを調べるのもまた楽しいもの」と、熱っぽく語る。

　街の歴史の傍らに歌あり――。

　今、あなたが歩いている道にも、いつか物語が生まれ、物語は歌となって誰かの耳に届く日が来るかもしれない。

## 合い言葉は、KFM

KFMとは、略して『北九州のフォークを盛り上げる会』。会長の福井隆夫さんは、高校時代にギターに出会い、以来フォークソングを愛し続けてきた人。妻の千賀子さんと共に、事務局を立ちあげ、運営している。なお、隆夫さんは“橋暮慎吾”という芸名で音楽活動中。1978年に自ら呼びかけ結成したバンド『仮名文』は、メンバーの入れ替わりはありつつも現役続行中だ。着実に増えつつある音楽を愛する会員と共に、市内のさまざまなイベントに出演している。毎月第2日曜日は、門司港海峡ドラマシップにて行われているライブにレギュラー出演中。

### 『KFM 北九州のフォークを盛り上げる会』

事務局:小倉北区下富野2-1-27  
☎050-3766-5903  
[http://music.geocities.jp/kitakyu\\_folk/](http://music.geocities.jp/kitakyu_folk/)

## 55年目のシンフォニー

八幡製鉄所を舞台にした映画『この天の虹』（木下恵介監督・1958年）の、劇中の音楽会シーンにてエキストラ出演をした仲間で結成。創立に稀な物語をもつ交響楽団は、100万都市・北九州市よりも5歳年上、今年55歳を数える。年2回の定期演奏会は、休むことなく回を重ね、今年の11月で110回目を迎えた。

現在の団員数は、19歳から74歳まで幅広い年代の110名にのぼる。学業や仕事を持っているメンバーがほとんどだが、市を代表する交響楽団として音楽文化を牽引してきた。

週に1度の定期練習は夜。楽器と、その日一日の出来事を抱えながら、足早に会場へ入ってくる楽団員たち。積み重ねる日々はそれぞれ異なれど、楽器を構えれば、みな音楽の一部になる。街に暮らす人々が奏でるシンフォニーは、街の表情そのものだ。

### 『北九州交響楽団』

事務局:小倉北区馬借1-3-23 ディーキューブギャラリー内  
☎093-533-3456  
<http://kita-q-orche.main.jp/index.html>  
\*2013年11月17日(日)、アルモニーサンク 北九州ソレイユホールにて第110回定期演奏会を開催。

## 耳に優しくしみる日本語

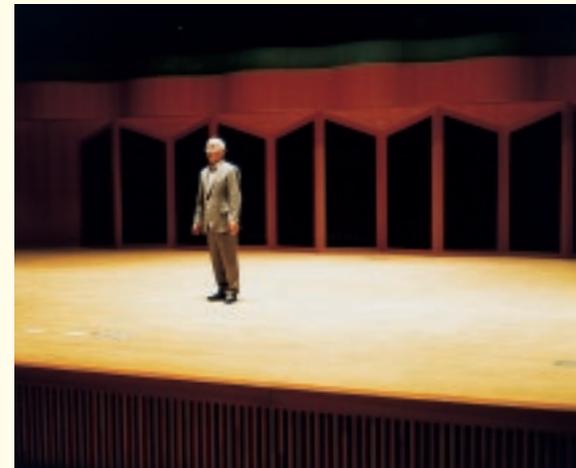
SPとは、スタンダード・プレイングのこと。対してLPのLはロングのことで、つまり回転数が早く溝が広いSP盤の再生時間は、LPの5分の1ほどしかない。両面で約10分。その一枚に込められた歌の物語は濃く、貴重だ。そんな儂くも優しい調べに魅了された安部嘉郎さんは、明治39年から昭和35年までに発売されたSPレコードを約2500枚所有している。そして、CDの音質とははるかに異なる響きを多くの人と共有したいと、年に4回のペースで『北九州SPレコードを聴く会』を催してきた。自作の蓄音機を携えて会場へ出向き、テーマに合わせた食事と共に、音楽に耳を傾けてもらう。その会も今年で20年目だが、耳に届く音は決して色あせることはない。

### 『北九州 SPレコードを聴く会』

小倉北区大田町14-10-203 ☎090-8352-2519  
\*12月16日に、西日本工業倶楽部にてライブ演奏と共に、恒例のクリスマスコンサートを開催。詳しくはお問い合わせを。



聴こえてくるよ、君の声。  
流れてくるよ、音楽が。



### 『北九州市立 響ホール』

八幡東区平野1-1-1 ☎093-662-4010  
9:00~20:00 12/29~1/3 休  
<http://www.hibiki-hall.jp/> \*公演内容など随時更新。

## 街に歌えば

木製の扉の向こうから漏れる力強い美声。哀愁漂う演歌でもなく、ご機嫌なポップソングでもない。よおく耳を澄ませば……、ん？ 校歌！

スナックに欠かせない娯楽、カラオケですが、『銀杏』のそれはひと味違う。

カウンターに着くと、お酒と一緒にオリジナルのカラオケリストが供される。じつは、ママさんは、北九州の街や風物を歌った歌の収集家。銀杏のアーカイブ棚には、明治から現代に至るまでのあらゆる“北九ソング”と、市内の学校校歌の音源がそろっているのだ。

なお、マイクを握れば、歌詞と一緒にカラ

## 重なり合う響き

満席時の残響時間は約1.8秒。一音が次の一音に重なり、次の一音にその次の一音が重なる。そうして音の追いかけっこが繰り返されるうちに、空間が音楽で満たされる。まるで、ホール自体が音を奏でる楽器のようだ。

舞台の中央に立ち、『愛の讃歌』を歌うのは館長の岩崎洋一さん。長年、合唱団の指導と普及活動を行ってきた岩崎さんは、自らも歌うことを愛する演者。そして自他ともに認める響ホールの営業マンだ。クラシック音楽や歌をもっと身近に感じてほしいと、ワンコイン・ロビーコンサートを企画したり、コンサート後にアーティストトークを催したり、チケットを購入してくれたお客さんを、オーケストラのリハーサル見学に無料で招いたり、スタッフと知恵をしばりながら、「響ホール」をより多くの人に身近に感じてもらえるように、奮闘している。

オケ映像が流れる。こちらは、ママさん撮影・編集のオリジナル。ハンディカメラを携えて市内へ出向いてロケを敢行、古い映像も収集し、差し込み編集を行っている。

なお、青春のあの日を求めて夜な夜な集うお父さんたちのために、校歌の映像は、卒業年代に合わせて複数製作。

卒業アルバムから抜粋された若き表情を眺めながら、肩を組んで歌う声が、今夜も小倉の街にこだましている。

### 『スナック銀杏(童謡・唱歌・懐メロの店)』

小倉北区鍛冶町1-2-2 坪根ビルB1F  
☎093-541-5516

# 快適生活+職=北九州LIFE

## 生活費が安い

消費者物価指数は政令市の中でも低く、民間賃貸住宅の家賃は東京都区部の半分以下。転入世帯の住宅購入を支援する制度もあり、人生設計を見直すチャンスかも。

## 食べ物が美味しい

食は生活の基本。近郊の産地で育った新鮮で美味しい旬の野菜や果物、魚介類が手軽に安く手に入ります。海にも山にも近い北九州ならではの豊かな食材。

## 身近な自然

山、海、川のどれを取っても都心部から車で40分程度でたどり着く自然豊かな北九州。休みには気軽にアウトドアを楽しみ、ほっと心を癒すことが出来ます。家族との充実した時間作りにも最適です。

## 安心の子育て環境

親子で安心して、安全に思い切り遊べる施設や24時間365日小児救急を行っている医療体制(市内に4ヶ所)は高い評価を受けています。

## + じっくり充実勤務

製造業のイメージが強い北九州ですが、IT、医療・福祉、サービス業などの求人も多く登録されています。一所でじっくりと取り組み、成果が実感できる中小企業の求人も。あなたのこれまでの経験を北九州で生かして、さらに充実した時間を過ごしませんか？

いいところ  
たくさん!

北九州市  
U・Iターン  
促進事業

北九州市があなたの  
就職活動をサポートします。

北九州市内企業の求人情報を公開中!

北九州市 Uターン

検索

U・Iターン促進事業サイト  
<http://www.shigotomarugoto.info/ui-turn/>

北九州市 産業経済局 雇用政策課 ☎0120-0296-46  
おふくろ よろこぶ

STARFLYER

CREDIT CARD × MILEAGE

STARFLYER CARD

デザインで選ぶステイタス。



年会費 永年無料\*

マイレージ機能付クレジットカード

\*VISAカードの年会費は初年度無料、2年目以降は条件を満たせば無料となります。

詳しくは

[www.starflyer.jp](http://www.starflyer.jp)

マイページ機能などWEBが使いやすくなりました

Good Design 「新日本様式」 \*カードはイメージです。







# 北九州芸術劇場

KITAKYUSHU PERFORMING ARTS CENTER

ticket club card

## メンバー募集

良い舞台を見終えた時の  
感動と胸のドキドキ感を  
ずっと忘れたくないアナタへ。

### 会費：500円、入会金なし

有効期限＝入会日から2年間。入会日から2年後の同月末日まで。  
入会方法＝[窓口]北九州芸術劇場プレイガイド(10:00～19:00)  
小倉北区室町1-1-11 リバーウォーク北九州5F  
[電話]093-562-8435(10:00～18:00)

### 特典1：電話・インターネットによるチケットの先行予約

\*先行販売枚数には限りがあります。(劇場指定主催公演のみ対象)  
\*先行販売での座席位置は、すべて良いお席とは限りませんので予めご了承ください。

### 特典2：ポイント積立による割引サービス

\*チケット購入金額の5%相当のポイントがつきます。(劇場指定主催公演のみ対象/1公演につき4枚迄)  
\*積立ポイントは100ポイント単位(1ポイント1円)で次回購入より利用可能です。

### 特典3：年間ラインナップのご案内

\*公演スケジュールやチケット前売情報などを掲載した情報誌Qを年4回お届けします。

### 特典4：協賛店での割引サービス

\*リバーウォーク北九州デロシティ内を中心とした  
協賛店でのお得なサービスがあります。

北九州芸術劇場  
公式ツイッター  
<http://twitter.com/kicpac>

公演情報や参加者募集情報ほか、  
日々さまざまな  
劇場の情報を発信中。

北九州芸術劇場  
KITAKYUSHU PERFORMING ARTS CENTER

●お問い合わせは

チケットクラブ TEL.093-562-8435 (10:00～18:00)

詳しくは 北九州芸術劇場 チケットクラブ

